（第２号様式）（用紙日本工業規格Ａ３横長型）
神奈川県教育委員会教育長　殿

提出日：平成 30 年３月 28 日
学校名：県立津久井高等学校（定時制）

平成 29 年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標（平成 28 年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価（３月 19 日実施）	総合評価（３月 26 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①社会で活用できる基礎・基本的な学力の定着と、他者と関わるための力の習得を目指し、きめ細やかな学習指導を行う。 ②育てたい生徒像の実現に向けた教育課程の再編成を行う。	①生徒の学習課題を把握し、効果的な指導方法や教材の工夫を行う。 ②コミュニケーション力、行動力の育成を目指した教育課程の見直しを行う。	①ＴＴや小集団学習を活用し、教科ごとに課題解決型学習を増やし、授業改善研修会等で、取組を全教科で共有し、一層の授業改善を図る。 ②新学習指導要領の研究を進め、コミュニケーション力、行動力の育成に資する新教育課程編成の準備を行う。	①生徒による授業評価の中の「基礎学力」と「話し合いの機会」の数値が３以上か。 ②新教育課程実施に向けた案を作成できたか。	①12 月実施の第２回授業評価で「基礎学力」「話し合いの機会」がそれぞれ 3.2、3.3 となり、当初の目標を達成した。 ②新学習指導要領に係る校内研修を実施し、新教育課程編成へ向け、各教科で教科目標等の検討を行った。	①今後も組織的授業改善に取り組み、生徒のコミュニケーション力の向上を目指して、全教科で「話し合いの機会」をより多く設け、授業評価における数値を 3.3 以上にする。 ①生徒の学習実態を的確に把握し、ＴＴのあり方を校内研修等で研究し実践する。 ②各教科の検討結果を評価・修正し、本校定時制として必要な新教育課程の編成を行う。	ＩＣＴを利活用した授業を進めてはどうか。視覚化等の面で、生徒にとってわかりやすい授業となる効果が見込まれる。 形にとらわれないアクティブ・ラーニングが必要である。	①生徒の学習課題の中で、基礎学力・コミュニケーション力に焦点をあてており、生徒による授業評価の「基礎学力」「話し合いの機会」の数値目標は達成された。基礎学力・コミュニケーション力の向上は更に必要であり、その向上に資する授業を研究する必要がある。 ②新学習指導要領の研究、新教育課程の検討を行うことができた。	①生徒のコミュニケーション力の向上を目指し、全教科で「話し合いの機会」をより多く設け、授業評価における数値を 3.3 以上にする。また、基礎学力の向上を目指し、ＴＴやＩＣＴ、学び直し等を効果的に活用するための組織的授業改善に取り組む。 ②コミュニケーション力、行動力の育成を目指した教育課程の編成に取り組む。
2	生徒指導・支援	①モラル･マナー･ルールを遵守する心を育成し、高校生として良識ある行動ができるように、規範意識と生活習慣を身につけさせる。 ②生徒が安心して活動できるための支援体制の充実を図るとともに、コミュニケーション力を育成する。	①生徒に規範意識と生活習慣を身につけさせるため、全教職員で指導方針の共有を図り、職員一丸となった生徒指導を行う。 ②ＳＣ及びＳＳＷや学習サポート員等を活用した生徒支援体制の充実を図る。	①職員会議等で指導方針の共有化を図るとともに、文書化し非常勤講師を含め、職員一丸となった生徒指導を行う。 ②ＳＣ及びＳＳＷに職員向け研修を企画・実施し、職員の意識啓発を図るとともに、教育相談コーディネーターを中心とした支援体制の整備・充実を図る。また、個別の支援が必要な生徒に対する支援体制を構築する。	①指導方針を文書化し、全職員で共有し、生徒指導を行ったか。 ②ＳＣ・ＳＳＷの職員に対する研修、ケース会議、コンサルテーションの回数。 学習サポート員等と連携し、個別の支援等を行うことができたか。	①年度当初に生徒指導規定を全職員に配布し、啓発・周知・共有化を図った。また、いじめ防止等のための基本方針と対策マニュアルの改訂を行った。 ②年度当初にＳＳＷによる職員研修を実施し、ＳＳＷの活動の理解及びコミュニケーションが深まった。 ②ケース会議は、常にＳＳＷに参加を要請し、２学期までに９回実施、会議の回数が増加した。 ②外国つながり・高齢者の生徒、理科の実験準備、キャリア教育の学習サポート員を雇用し、支援体制の充実を図った。	①非常勤職員に徹底周知しきれていない部分があり、次年度４月に非常勤職員向けオリエンテーションを行う。 ②教育相談コーディネーターがハブ役となり、職員や生徒がＳＳＷとのコンサルテーションの機会をより多く持てるようにマネジメントし、ケース会議についてもより即時的に、かつ機動的に実施できるようにし、前年度より多く（きめ細かに）ケース会議を設定する。 ②学習サポート員は年度単位の事業なので、次年度も継続して支援を行う。	日常や授業を見ても生徒は落ち着いている。一方で、支援が必要な生徒が増えた印象がある。子どもたちの「生きづらさ」があることを理解することが必要である。授業を活用して自己肯定感を高めていく取組を行って欲しい。 成果をいかに評価するか、生徒・保護者に徹底する必要がある。	①生徒指導規定を全職員に配布し、啓発・周知・共有化を図ることにより、職員が一丸となった生徒指導を行ったが、その取組を非常勤講師まで広げるには至っていない。 ②ケース会議はＳＳＷも参加し、迅速で丁寧な検討・対応ができた。更に全職員がＳＳＷ等の専門的知識を有する職員の役割を理解し、活用できる体制をつくる必要がある。 ②外国つながりの生徒・高齢の生徒への個別の支援、及び理科の特色ある授業の実験準備、キャリア教育の推進について、学習サポート員の活用により成果を挙げた。	①全教職員で指導方針の共有を図り、職員一丸となった生徒指導を行うことを目標に、指導方針等を文書化し、全職員で共有するとともに、４月に非常勤職員対象のオリエンテーションを行う。 ②引き続き、ケース会議にＳＳＷが参加し、迅速で丁寧な検討・対応を行う。 また、コミュニケーションが苦手な生徒について、生徒や保護者との連携を図りながらケース会議で取り扱うことを検討する。更にＳＳＷ等の専門的知識を有効に活用する体制の構築を行う。 ②学習サポート員の活用による個別の支援等は継続して行う。

	視点	４年間の目標 （平成28年度策定）	１年間の目標	取　組　の　内　容		校　内　評　価		学校関係者評価 （３月19日実施）	総合評価（３月26日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
３	進路指導・支援	生徒一人ひとりが将来設計を考え、進路決定できる力を育成するとともに、進路実現を可能とするために、計画的かつ系統的な指導・支援体制の充実を図る。	生徒に働くことの価値について学ばせるため、前年度の内容に加え、新らたなキャリアプログラムを実施する。	総合的な学習の時間やＬＨＲ等を活用し、ＮＰＯや地域の人材等と連携して、ワークショップなどアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れたプログラムを実施する。また、働くことの価値を実体験の中で学ばせるため、インターンシップを積極的に活用する。	総合的な学習の時間やＬＨＲ等において、新たなキャリアプログラムを実施できたか。 インターンシップへの生徒の参加割合が上がったか。	ＮＰＯや地域の人材と連携しながら対話やグループワークを取り入れた新たなキャリアプログラムを計画的に実践した。 インターンシップに取り組んだ生徒は２人であったが、内向的でアルバイトをしていない生徒が体験したことに意味がある。	コミュニケーションが苦手な生徒に対して、キャリアと就職指導と学習支援を有機的に統合して、どうやって社会に出て自立して働く力を身に付けさせるかというプログラムを構築する。 地元の商工会議所等と連携して、地域におけるインターンシップ事業を拡大し、協力企業を増やし、参加者を増加させる。	何故働かなければならないか、何のために働くのか、働く意義を学習する機会を設ける必要があるのではないか。体験をはじめとした「感じる授業」を行って欲しい。また、青年会議所でも様々なプログラムを行っているので活用して欲しい。	生徒に働くことの価値を学ばせるため、ＮＰＯや地域の人材と連携し、新たなキャリアプログラムを計画的に実践した。就職指導に関して、コミュニケーションが苦手な生徒に対する手立てを構築する必要がある。インターンシップは、アルバイトをしていない生徒が体験したことは成果であるが、参加割合を上げる必要がある。	コミュニケーションが苦手な生徒に対して、社会で自立して働く力を身に付けさせるために、４年間を見通してキャリアと就職指導と学習支援を有機的に統合したプログラムを構築する。また、地元の商工会議所等と連携して、地域におけるインターンシップ事業を拡大し、協力企業を増やし、参加者を増加させる。
４	地域等との協働	学校からの情報発信を積極的に行うとともに、家庭・地域社会との連携や交流を推進し、地域に愛される学校づくりを推進する。	地域との連携や交流を継続・発展させるため、生徒が参加しやすい形態を構築し、生徒の参加活動をキャリア教育の中に位置づけていく。また、学校と保護者・地域等が協働し、生徒を支える学校づくり及び地域を担う人材育成を目指すための、新たな取組への研究を行う。	地域との連携や交流を継続・発展させるため、生徒への事前指導や教員の指導体制を整備し、生徒の地域行事等への参加を積極的に勧め、参加した生徒に活動を振り返らせることで、自己のキャリア形成を意識させる。また、本校らしいコミュニティ・スクールの研究を行う。	生徒の振り返りが活動に対して肯定的であったか。 コミュニティ・スクールのイメージを描くことができたか。	今年度も近隣の小学校との「農業体験交流」や特別支援学校・老人ホームへの訪問、中村自治会ほたる祭りへの露店参加といった行事を実施した。その結果、地域との連帯を深めることができた。 １学期はコミュニティ・スクール通信を９回配信し、イメージ作りを行った。10月に次年度指定校に決定し、２学期は全定合同研修会の実施、検討会議の設置等を行い、実務に入った。	年々、行事への参加生徒が減少している。生徒への働きかけに工夫を要するとともに、生徒への教育的効果を考え、今後も粘り強く継続的に行事を実施する。 コミュニティ・スクールについては、指定校になったことから、研究にとどまらず、実施計画まで進めた。今後はＰＤＣＡサイクルのＤＣＡを的確に行う。	地域貢献に取り組むとともに、地域の力を活かして様々な取組を行って欲しい。 「学校へ行こう週間」の案内等、ホームページを利用して、学校からの情報発信を積極的に行って欲しい。	農業体験交流、特別支援学校・老人ホームへの訪問、中村自治会ほたる祭りへのボランティア参加と、地域との連携や交流は継続して行っているが、参加生徒が減少しており、発展させるための取組が不十分である。 コミュニティ・スクールについては、指定校になったことから、イメージ作りに留まらず、全定合同研修会の実施、検討会議の設置等を経て、実施計画の作成まで進めることができた。	地域との連携や交流については、生徒への教育的効果を考え、今後も粘り強く継続的に行事を実施する。また、生徒への働きかけの工夫等で参加数を増加させるとともに、コミュニティ・スクール等を活用し、地域の力を活かしながら、発展させる手立てを構築する。 コミュニティ・スクールについては、指定校になったことから、今後はＰＤＣＡサイクルのＤＣＡに取り組む。
５	学校管理 学校運営	①事故・不祥事の防止を徹底するとともに、防災意識を高め、安全教育を推進する。 ②いのちを大切にする心、いじめを許さない心を育む教育を推進する。	①事故・不祥事防止に向け、ナレッジマネジメントを徹底する。 ①夜間定時制としての防災体制の確立を図る。 ②「共生・いのち・生きる」を考えさせる取組を通して、いのちを大切にする心、他者を理解する心等を育むとともにいじめの抑止に繋げる。	①知識共有のためのファイル管理を進め、作業の効率化、可視化を進める。 ①夜間における災害発生に備えた体制作りや訓練を行う。 ②「共生･いのち･生きる」を考える授業を各学期に行う。	①ファイル管理の進捗状況。 ①防災宿泊訓練を実施し、防災意識を高めたか。 ②「共生･いのち･生きる」を考える授業を何回行うことができたか。また、いのちを大切にする心、他者を理解する心を育むことができたか。	①知識共有のためにファイル管理方法をグループ毎に変更し、作業の効率化、可視化を行った。 ①夜間における災害発生を想定した防災宿泊訓練を実施、生徒の防災意識向上に良好なアンケート結果を得た。 ②「共生･いのち･生きる」を考える授業を年間６回行ない、生徒の人権感覚向上に努めた。	①継続して行っていくことにより、一層の効率化、可視化を図る。 ①次年度はより地域と連携して、今年度以上に実践的に、電気・水道等のライフラインが全て使用できないという設定で行う。ただし、生徒や職員の健康面での配慮を行う。 ②「共生･いのち･生きる」の授業で用いる視聴覚教材を更新する。	生きることの意義を学ぶことに力を入れて欲しい。それを感じることができる授業があると良い。 定時制は生徒数が減っている。定時制を必要とする生徒のために、存続する手立てを構築して欲しい。 教室の清掃が不十分と感じた。環境美化の徹底を図って欲しい。	①知識共有のためにファイル管理方法をグループ毎に変更し、作業の効率化、可視化を行い、ナレッジマネジメントを推進した。 ①夜間における災害発生を想定した防災宿泊訓練を実施し、生徒の防災意識向上に良好なアンケート結果を得た。 ②「共生･いのち･生きる」を考える授業を年間６回行い、生徒の人権感覚向上に努めた。	①ナレッジマネジメントの推進を継続して行い、一層の効率化、可視化を図る。 ①地域との連携を強化し、生徒や職員の健康面の配慮を行いながら、電気・水道等のライフラインが全て使用できないという設定で防災宿泊訓練を行うことを検討する。 ②引き続き「共生･いのち･生きる」の授業を行うとともに、視聴覚教材を更新する。 ②学習環境の整備を進める。